

(2) 大水をふせぐ

大水のひがい

わたしたちの町は、まわりの市町村と比べると土地が低く、川の水が集まりやすい地域です。そのため、大雨が続いて川があふれ、家や田畠にひ害を与えたことが何回かありました。



▲昭和31年黒沢地区をおそった大水



当時、消防団員だった えびなまさし 海老名昌之さんの話

昭和31年7月1日からふり始めた雨は、半月の間ふりつづきました。道路は、ぶよぶよになっていました。消防の半しょうをならして、けいかいにあたりましたが、16日午後10時ごろ、家が流され出しました。私も他の消防団員とともにかけつけていましたが、身うごきがとれず、近くの知り合いの家で夜を明かしました。17日の午前2時までに次々と家が流されました。女の人が、「家が流される!!」と言って、川にとびこんだ人もいます。家が流されたみんなは、上流の山ににげこみました。私は、山をこえて家に帰ったが、体がふるえてしかたなく、2・3日ねむれませんでした。

1956年（昭和31年）7月に黒沢地区をおそった大水は、死者6名、行方不明者3名、こわれたり流されたりした家41戸など、大きなひ害を出しました。また、1967年（昭和42年）8月と1998年（平成10年）7～8月には、集中豪雨で奥川がぞう水し、橋が流されたり家や学校が水びたしになりました。田畠が土しゃでうずまつた所もあり、ひ害額はいずれも8億円をこしました。

大水をふせぐ努力

大水のひ害にあった人々は、協力し合って、こわれた家や流された田畠を直しました。町でも、国や県のほ助を受けながら、こわれた橋や道路を直すために努力しました。

ひ害にあった人々や町はさらに、二度とひ害にあわないために、